連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第5回

東京大学大学院農学生命科学研究科
森林科学専攻　森林風致計画学研究室　教授　下村　彰男

『実存・空間・建築』SD選書78

ノルベルグ・シュルツ著、加藤邦男訳

鹿島出版会　1973年（原書は1971年）

この哲学的な表題の古い本を「わたしの1冊」として取り上げたのは、以下の2つの理由からである。まずは何より、学生時代に感銘を受け、その後の私自身の思考に少なからぬ影響を受けたことであり、もう一点は、この分野違いとも受け止められる書籍が、観光地や施設づくりにも重要な示唆を与えてくれると考えるからである。

著者のN・シュルツはノルウェーの建築史、建築論を専門とする研究者である。本書は、人の営為や存在に対する哲学的な思索と具体的な建築空間とを結びつけ、そのあり方に裏づけを与えようとした図書であり、単なる哲学書にも、また建築の方法書にもとどまっていない。人の心や営みが空間や環境と深く関わっていることを示してくれる本である。

本書の主たる論旨は、「人間が対象に向かって定位するのは基本的なこと」であり、その定位において人間は「環境との間に力動的な均衡を打ち立てることを目指している」というものである。これは、観光にとって重要な課題である「寛ぎ」や「安らぎ」にも関係しており、少し乱暴に言えば、人は空間をはじめとする身のまわりの環境にしっかりと定位することで安息・安寧を得ているという示唆である。そして、定位の手がかりとして、中心―場所、方向―通路、区域―領域という概念を提示しつつ、地理、景観、都市、住居、器物の諸段階における様々な事例を読み解きながら、人と環境との関係構築のあり方を分かりやすく述べている。

観光地をはじめ遊楽のための空間は日常を忘れさせる異界としての環境形成が求められる。また、観光は日常世界を離れる行為であり、見知らぬ世界で強いられる緊張をいかに解きほぐすかが重要な鍵となる。こうした課題解決にとって、容易にしっかりと定位することができ、心理的・行動的な自由が得られる環境づくりが基本であることを提示してくれる図書と言える。

この文章を書くに当たり、本書を久しぶりに手にとって拾い読みしようとしたものの途中で断念してしまった。学生時代には一気に読んでしまったし、その後も折に触れて開いていたので、特に難解という印象はない。実際、哲学的な論術に終始するのではなく、具体的な空間事例を引きながら、実存的空間について分かりやすく論じられている。ただ、やはり拾い読みで済ませることのできる本ではないようだ。寛いで、ゆったりとした時間が過ごせる場所に、この一冊を持って行き、周辺の環境を楽しみながら再読したいと考えている。

下村彰男（しもむら　あきお）
1955年兵庫県生まれ。東京大学農学部林学科卒。（株）ラック計画研究所を経て、現在、東京大学大学院農学生命科学研究科教授（森林風致計画学研究室）。専門は、造園学、風景計画、観光計画、エコツーリズム。各地域の文化的景観の保全管理方策などについて研究。共著に『人と森の環境学』『ランドスケープのしごと』『都市美』『フォレストスケープ』『森林風景計画学』など。